

働くことに悩む若者たちへ

東京大学社会科学研究所助教

玄田 有史

社会が求める若者

今ここに、二人の若者がいたとしよう。

一人の若者（少年A）は、どんな仕事でもそれなりにそつなくこなし、何でも要領良く仕上げることができる。もう一方の若者（少年B）は、器用というには程遠く、一つの仕事を仕上げるのに時間がかかり、失敗も少なくない。最近はやりの成果主義でいえば、明らかに成果を上げているのは少年Aだ。

ただ、そんな仕事のできる少年Aだが、なぜかあいさつをしない。だれかに何かをしてもらっても「ありがとう」という言葉が出てこない。あまり失敗しないAでも、

ときには失敗をする。それでもゼツタイに「ごめんなさい」と言うことはない。反対に、仕事はイマイチの少年Bは、失敗をよくする代わり、そのたびに「すみません」と自分が皆に迷惑を掛けたことを正直に詫びる。だれかに仕事を助けてもらったときにも、心を込めて「ありがとうございました」と言うことができる。

保護司の皆さんは、どちらの少年が社会の中でより評価され、この若者を一人前にしてやりたいと期待され、実際に育てられると、お感じだろうか。労働問題を二十一年近く自分なりに研究してきた者として、圧倒的にそれは、少年Bのほうだと、私は断言する。

本当に求められている人材

そもそも企業が新たに人を採用するとき、一番重視しているものは何だろうか。会社ですぐ役に立つ専門技能だろうか。確かに一部ではそうかもしれない。だが、多くの中小企業は「うちは専門技能も大切だけれど、いろいろな仕事をやってもらわないと困る」と言ったりするものだ。それに技術の変化が激しい昨今、専門と思われた技術も早晩、陳腐化したりする。

企業が人を雇うとき、高度な専門技能よりも、昔も今も変わらないもつと大切なことがある。それは何といつても「人柄」である。企業の活動目的は、つまるところ、利益を上げることである。そのために優秀な人材を求めているのは当然だ。しかし、働く人たちにとって、新しい人材を評価する基準は「その人と一緒に仕事がしたいか」ということだ。

仕事は多かれ少なかれ、チームで行う。チームのメンバーがお互い信頼できる関係になれば、組織として良い成果は上げられない。だから新人に求めるのは、何よりも一緒に仕事がしたくなる、職場の雰囲気をよくする

のにプラスになる、その人柄なのだ。

では、人柄はどうやって判断できるのか。まずは、しつかりとあいさつの習慣を身に付けていることだろう。以前、テレビを見ていたら、タレントの綾小路きみまろさんが、後輩の小学生に対し、仕事をやる上で一番大切なのは「ありがとうございますと、すみませんがちゃんと伝えることです」と教えていた。苦労の積み重ねの中から発せられたその言葉は絶対に正しい。

あいさつ以外に人柄を表す大切なことがあるとすれば、それは「約束を守る」ということだろう。約束した時間に間違いなく行く。約束の時間に平気で遅れることは、相手を軽んじていると表現することと同じだ。もし何かの事情やトラブルで遅刻しそうになったら、それこそすぐに電話して詫びる。そのために携帯電話はあるのだ。

高度な技能を身に付けた人間でなければ仕事ができないなんて、私はウソだと思う。むしろ多くの「働く」ということは、もつと地道なことを一つひとつコツコツとやり遂げるということだ。ちゃんとあいさつができて、平気で約束を破るということがなければ、だれでもそれなりの仕事はできるのだ。その当たり前の事実を、保護

司の皆さんは自信を持って若者に伝えていただきたい。

履歴書の空白

働き出そうとするとき、大きな壁に直面する人々がいる。求人に応募するために、履歴書を作成する。しかし、その履歴書には、学校を卒業したり中退した後に、一定の空白期間がある。面接のときに、その空白の意味について問われ、うまく答えられずに不採用となったりする。そんな経験がショックで就職活動そのものが怖くなり、もう働き出せなくなる。「履歴書の空白」と呼ばれる問題である。

実際、自分の履歴に空白期間を抱える若者が働くことに踏み出そうとするとき、保護司を始め、周囲の大人はどのようなアドバイスをすればいいのだろうか。

企業によっては、この空白がある人材を何か問題のある人間と決め付け、採用に否定的になる場合もある。そんな会社で面接で出会ってしまったら、さっさと帰ってくればいい。しかし、多くのまっとうな企業にとっては、空白そのものに問題があるわけではない。大事なのは、その空白の意味をどのように自分なりに位置付けてきて、

就職に臨んでいるかだ。

それまで収入になる仕事をしていなくても、何もしていないということではないかもしれない。ある就職問題の専門家は、そんなときは「家の手伝いをしていまして、自信を持って言えばいいんだ」と言う。家族に介護を要する人がいれば、介護は立派な仕事だ。働く家族に代わり自分が家事を切り盛りしていたのであれば、それも意味のある仕事である。

そんなのはつきりと言えることがなければ、どうするか。まず大切なのは正直に語ることである。面接相手の多くは、何度も採用面接を経験してきている。少々ウソをしやべつてもすぐにばれる。何もしていなければ「何もしていませんでした」でもいい。何もしていない間に自分は何を考え、何を悩んできたのか。その上で、なぜその空白にピリオドを打ち、働こうと思ったのか、この会社で働きたいと思ったのか。上手でなくていい。訥々としていいから自分の言葉で正直に話すことである。

過去に空白を抱えた人が面接に臨むことは、正直、困難が伴う。誤解や偏見にさらされることもある。その中で働くことに希望を持つとうと、勇気を振り絞って面接の場

に立ち向かおうとしている若者を理解しようとする人々は必ずいる。

問題は履歴書の空白ではない。過去に決別しようとする勇氣と、自分の現状を正直に語ろうとする気持ち、そしてどこかに自分を分かってくれる人がいると信じる思いである。

やりがいに出会う

多くの人が仕事に求めるものは、所得や安定と同時に、やりがいである。

「やりがいの感じられる仕事がいい」と多くの若者が望む。その一方で、同時に「そんな望みはどうせ実現しないだろう」という思いを持つ人たちも多い。

若者にとって、働くということとは、やりがいの感じられないつまらないものであるか、大変に過酷で苦しいものであるように見える。非正社員の仕事に就けば、それは単純な労働ばかりで面白みも何もないと思っていたりする。確かに非正社員の仕事には単調に思える仕事も多い。だが毎日、売店に立って商品を売るだけの仕事でも、お客さんに気持ち良く買ってもらえるように、言い方を

工夫するとか、自分なりにできることもある。

ある牛丼チェーン店では、アルバイトに「目線」を大切にするように指導する。お客さんに常に自然な目線を注ぎ、食べ終わった客が勘定を要求する前に、自分から歩み寄っていく。目線の先に「お茶」を求めそうな客がいれば、言われる前にお茶を出す。

アルバイトやフリーターで支えられているコンビニも、軌道に乗っているお店ほど、店長やオーナーが丁寧な指導に従業員に行っていたりする。二四時間営業のお店である以上、アルバイトやフリーターが自分の判断で考え、行動する習慣を身に付けていなければ、経営は成り立たない。自分の判断で動けるようになるための指導が行き届いたお店で働くフリーターは、仕事にやりがいを感じることが多い。非正社員だからやりがいは絶対に得られないというわけではないのだ。

一方、正社員でも、やりがいは得られないかもしれないと考える若者もいる。正社員になれば収入自体は多くても、サービスマン業を強いられたり、心の病になつたりすることも多く、身も心もボロボロになって使い捨てにされるのではないか、結局、正社員になつても、やりが

いなどとは程遠い仕事しかできない、と。

確かにサービス残業や職場のメンタル問題は、社会全体で解消していかなければならない問題だ。ただ、だからといって、すべての正社員が疲弊して仕事にやりがいを感じられないというわけではない。正社員として責任のある仕事を任せられて、それをなんとかやり遂げ、仲間と気持ちの良い打ち上げをしたときの感激は、ほかでは得られまい。

作家の故遠藤周作氏が「エッセイかどこかで、仕事には三種類しかない」といったことを書かれていたという話を聞いたことがある。一つは、ただ苦しい仕事、だれもやりたいと思わない。二つ目は、楽しい仕事、これは一見やりたいと思うが、じきイヤになる。楽しいだけの仕事はすぐに飽きるからだ。一番良いのは三番目の仕事、それは苦楽（くるたの）しい仕事である。日々の仕事は苦しくてしんどい。しかし、そんな苦しい仕事だからこそ、やり遂げたときには特有の達成感や楽しさを感じるというものだ。

正社員でも非正社員でも、ほとんどの仕事は、その人の考え次第で、苦楽しい仕事になるものだ。

くは、スポーツ選手、漫画家、学校の先生など、小さいころからの憧れ（あこが）れといったものが多い。同じく中学三年の時にも、やや減るが、六割が職業希望を保有していた。その希望の自身は、単なる憧れだけでなく、プログラマーや薬剤師といった将来を意識したより具体的なものも多かった。

そのうち、かつて持っていた職業希望に実際就いた経験があるのは、どれくらいだったのか。中学三年の時の希望を大人になって実現したことがある人たちは全体の約十五パーセント、小学六年のときの希望に至ってはわずか八パーセントにすぎなかった。お世辞にも、子どもころの夢や希望を多くが実現してきたとはいえない数字だ。

職業にせよ、何にせよ、インターネットや携帯などを活用することで、以前に比べて大量な情報が手に入りやすい時代になった。かつての子どもであれば単純に憧れて夢見た仕事（プロスポーツ選手、歌手など）に就くことが、実際にはどれだけ難しいかを、現代の若者は直感的に理解している。情報化社会によって、若者は希望や夢を持ちにくい時代になっている。

働くことへの希望

働くこうにも、やりたい仕事が見付からないという若者は多い。自分が望む仕事があったとしても、どうせそんな仕事に就けるわけがないと、最初から諦めてしまったりする。

大人としては、若者には希望を持って未来にまい進して欲しいと願ったりするものだ。だがその大人にいが就いた経験を持つのだろうか。

現在、私の所属する東京大学社会科学研究所は、「希望プロジェクト」と題して、希望と社会の関係について、経済、歴史、法律、文化など、様々な観点から調査研究している。二〇〇五年の秋、二十代から四十代の約九〇〇名に対してアンケートを行い、個人の保有する希望と働き方の関係などについて調査した（その詳細は、玄田有史編『希望学』中公新書ラクレ、二〇〇六年で述べている）。

その調査によると、小学六年生の時、およそ七割が将来なりたいと希望する職業を持っていた。その内容の多寡（おほ）は致し方ないのかもしれない。しかし、希望学を研究しながら、私は若者に働くことへの希望を持ってほしいと考えるようになった。希望の多くは実現せず、失望に変わる。しかし、そんな失望を経験して初めて分かる自分の可能性や本当の希望がある。野球選手を夢見た若者が挫折し、その後に、自分が選手でなくても、子どもたちが野球を楽しむ姿を夢見て芝生職人を目指すようになったりする。希望がなければ失望もできない。失望や失敗をおそれて、将来に希望を見いだすことを躊躇（ちゅうちゆ）するのは、あまりに残念だ。

働くことに希望が持てない若者には、例えば、かつて小さいころに好きで好きでたまらなかったことを思い出させてあげてほしい。その仕事には実際就けなかったとしても、それを基点にして今自分がやるべきと感じる仕事が見付かったりすることも多い。

若者が失敗を繰り返しながら、働くことに本当の希望を見いだす上で、一緒に考えたり話に乗ってくれる大人の存在は大きい。働くことに悩む若者にとって、保護司の方々がそんな頼れる大人であってほしいと願っている。